

## 第 124 回院内集会

福島原発行動隊は4月21日(金)、2022年8月に避難指示が解除された特定復興再生拠点区域を中心に、産業拠点の構築から双葉駅西側の新生活拠点へと復興施策を進めている福島県双葉町の伊澤史朗町長を講師にお招きし標記の集会を開催しました。

双葉町からは伊澤史朗町長、橋本靖治総務課長が参加され、行動隊からの参加は10名でした。

伊澤町長からのご挨拶の後、橋本総務課長が東日本大震災・原発事故と双葉町の復興状況について講演され、その後、橋本課長の闊達なご発言にも助けられ、行動隊会員との活発な質疑が繰り広げられました。

講演内容については下記リンクから、あるいは右のQRコードからご覧ください。  
[「東日本大震災・原発事故と双葉町の復興状況について」](#)



### 【質疑】

**行動隊:**復興施策を進めるにあたって現在の福島第一原子力発電所のリスクをどのように評価されているか？

また、福島第一原子力発電所の現況についてどこから情報を得られているか？

**橋本課長:**現在の福島第一原子力発電所のリスクについては、現在進められている廃炉作業は安全性を担保されるべきだし担保されていると認識している。

福島第一原子力発電所の現況については、毎日資料を携え町役場に状況報告に来る東京電力社員から説明を受けている。

**行動隊:**福島第一原子力発電所の廃炉作業の進捗状況を可能な限り分かりやすくかつ客観的に報告する「イチエフウォッチャー」レポートを毎月更新している。行動隊のホームページ上からもご覧いただける。お役に立つかどうか一度ご覧いただくと幸い。

**橋本課長:**ありがとうございます。



講演する伊澤町長

**行動隊:**苦渋の選択の未受け入れられた中間貯蔵施設(福島県内での除染により発生した除染土、廃棄物を一時的に集約、保管する施設)について、定められた2045年までに解消されると期待されるか？

**橋本課長:**環境省が所管する中間貯蔵施設については、2015年に30年以内に施設内のすべての除染土・廃棄物を県外に搬出するというを前提に受け入れたものである。施設内には地権者からの借地、公共用地も含まれ、その賃貸契約期限は2045年となっている。国において除染土の再生利

用も検討されており、中間貯蔵施設は 2045 年には解消されるものと考えている。

**行動隊:**いわゆる ALPS 処理水の海洋放出についてどのようにお考えか？

**橋本課長:**ALPS 処理水の海洋放出について反対があることは承知している。

同時に、技術的にそれ以上浄化できない ALPS 処理水は今後も増え続け、保管し続ける場所はないと認識している。

ALPS 処理水を海洋放出するのは双葉町ではなく東京電力である。

**行動隊:**ただ住民の帰還を待つのではなく、東日本大震災・原子力災害伝承館や 20 件に上る企業誘致により復興を図る双葉町に対して福島原発行動隊ができることは何か？

**橋本課長:**具体的に言えば、国道 6 号線沿いに NPO 法人が設置を進めている花壇の除草等については充てる人手がないので、支援していただくとありがたい。

**行動隊:**行動隊は 5 月下旬に川内村の高田島ヴィンヤード支援等の福島行動を予定している。その折の支援に向けてご相談していきたい。

**橋本課長:**了解した。

**行動隊:**双葉町は大熊町とともに東京電力と三者協定を結んでおられるが、協定に基づいた福島第一原子力発電所内の立入検査はなされたか？

**橋本課長:**2011 年 6 月に構内に入り、当時の吉田所長から説明を受けた。現在と違って凄惨かつ過酷な状況だった。

**行動隊:**町として福島第一原子力発電所内の線量の測定等はなされているか？

**橋本課長:**東京電力をかばっているわけでもなく言いなりになっているわけでもないが、東京電力が出すデータを監督する立場と考えている。

**行動隊:**過日双葉町役場を訪れた時の周辺の印象だが、12 年前の檜葉町・大熊町・富岡町の状況という印象を得た。双葉駅西側の新生活拠点の整備などやはり 10 年単位の時間がかかるのだろうか？

**橋本課長:**双葉駅西側の新生活拠点の整備は 1, 2 年で終了する予定。

避難指示が解除されるためには住宅除染ないし家屋の解体が前提条件である。避難後 12 年の間に家屋は修復不能なほど荒廃し、ほとんどの住民は解体を選択している。その結果更地が拡がり、雑草が生い茂りゴーストタウンといったありさまである。

避難指示が解除された避難指示解除準備区域、特定復興再生拠点区域を合わせても町域全体の 15 %であり、残りの 85 %は除染すら手が着いていない。

今、ようやく復興のスタート地点に立ったというのが実情である。

**橋本課長:**事故前の自宅は現在の中間貯蔵施設内にあり、国に譲渡し解体された。子育てのこともあり 2013 年に日立市に居を構えた。自分は現在双葉町に住んでいるが、小学生だった子どもは大学生となり日立市も離れ、日立市に残る両親は、環境、社会関係、人間関係すべてが元に戻るなら帰還したいがそうならない限り帰還を希望しないとやっている。

12 年という時間の経過の中で、帰還を希望する町民は 12~13 %となり、60 %は帰還しないことを決めている。とくに子育て世代は動けない。過酷な町づくりのスタートである。

**行動隊:**明 22 日の工場開所式に来られる浅野燃系の社長に以下をお伝え願いたい、「行動隊は川内村のワイン事業に対して行ったと同様、貴社が双葉町で生産されるタオルについても販売促進に協力していきたい」。

# 2023 年度事業計画/予算

福島原発行動隊は、3月17日の理事会で2023年度事業計画ならび予算を決定し、内閣府に報告した。廃炉事業の先行きが依然として不透明であり、またコロナ禍により対人接触を控え目にしなければならない状況が続いていることから、2022年度と同様「前年度を継続する」ことを基本方針としている(事業計画ならびに予算は行動隊ホームページ2023/4/7掲載を参照)。

事業計画では、2022年度後半に行った特定復興再生拠点区域のある自治体の首長を講師とする院内集会の成果を踏まえて、こうした自治体で不足している作業人材を補うための営農支援などに当たる。

予算は、以下のように2022年度予算とほぼ同等とする。ただ、収入(会費と一般寄付金)は、前2022年度の実績がかなり落ち込んでいることに鑑み、前年度予算(80万円)より29万円減額して51万円とした。

- ・収入(会費と一般寄付金)51万円。
- ・支出180万円(事業費80%、管理費20%)
- ・収支差△129万円。
- ・事業費144万円の約13%(18.8万円)を「放射線モニタリング事業」に、約67%(96.4万円)を「復興支援事業」に、20%(28.8万円)を「研修事業」に充てる。
- ・2022年度からの繰越し金700万円(一般正味財産72万円+指定正味財産628万円)の内の指定正味財産を129

万円を取り崩し(振替)て収支赤字を埋める。  
・次年度への繰越し金(正味財産期末残高)は571万円(一般正味財産72万円+指定正味財産499万円)となる。

支出費用内訳(単位:円)	
科目	2023年度予算
【収入】	
経常収入	
受取会費	390,000
受取寄付金	1,410,000
一般受取寄付金	120,000
受取寄付金振替額	1,290,000
経常収益計	1,800,000
【支出】	
労災保険料等	15,000
印刷・資料作成費	241,000
通信運搬費	250,000
旅費・宿泊費	640,000
機材費	34,000
線量計校正費	0
臨時雇賃金	56,000
講師謝金等	30,000
給与手当	78,000
会場費	30,000
消耗・什器備品	69,000
宣伝広告費	17,000
賃借料	254,000
減価償却費	46,000
雑費	40,000
経常費用計	1,800,000
【収支】	
	0
一般正味財産期首残高	720,000
一般正味財産期末残高	720,000
指定正味財産増減	
一般正味財産への振替額	1,290,000
当期指定正味財産増減額	△1,290,000
指定正味財産期首残高	6,280,000
指定正味財産期末残高	4,990,000
正味財産期末残高(次年度への繰越額)	5,710,000

## 「SUPER ZERO」が来た！

安藤 博

知るひとぞ知る「魔法のタオル」のメーカー浅野撚糸が双葉町に工場進出して来たのを知ったのは、この2月末被災地/者支援活動の打ち合わせ等のため避難指示解除を待つ「特定復興再生拠点」のある東京電力福島第一原子力発電所に近い自治体役場を訪れた時のことです。福島には遠い岐阜県の安八町に本社のある1969年創業の企業です。その企業が、まだ町域の大半は立ち入り/居住が出来ない帰還困難区域のまま、住民は役場職員等わずか約60人というこの町に、  
SVCF 通信：第157号 2023年4月25日

約30億円の工場建設投資を行って進出してきたのは何故か『朝日新聞』が、4月22日の開所式(グランドオープン)を前にして4月20日の夕刊一面のほぼ全面を費やし、新設工場「SUPER ZERO」の航空写真付きで次のように伝えています。

同社の社長浅野雅巳氏は福島大学出身で、東日本大震災のとき「福島に駆け付けられなかった自分を『情けない』と自責の念にかられていた」こと。2019年の夏、「企業誘致をめざす原発周辺12市町村をめぐるツアーに参加した」際、伊澤史朗町長から「『企業の立場で考えたら、双葉町には来ない。うちに来ないでいいから、

(近隣町村の)双葉郡に来てくれ』と言われ、・・・町長の人柄にやられた。この人たちと一緒にやれる」と思い工場進出を決断したといひます。12 市町村のなかで、浅野社長との面談に首長が自ら当たったのは伊澤町長だけであったことも、2 月末私たちが双葉町の役場を訪問した際に聞きました。

魔法のタオル【エアーかおる】は、安価が武器の中国製品との死闘をしのいで開発した特許製品の糸「スーパーゼロ」を撚り合わせて作ります。新工場は岐阜の本社工場の 3 倍の広さで、カフェや販売所も併設。福島の大学、高校の新卒者 5 人など 12 人の地元採用者を含む 21 人が働きます。「年 500 トンを生産・・・生産量は倍増し、今後は海外にも輸出する計画」(『朝日新聞』4 月 20 日夕刊)です。

22 日の開所式で浅野雅己社長は「ここでしかできない我々の経営のイノベーションっていうのがありますからそこも含めて双葉を選びました」(福島中央テレビニュース)と述べています。

大震災に加えて原発事故の被害をうけた福島県の自治体のなかでも、東電福島第一原発が立地する双葉町は、隣接の大熊町とともに長く全町民が立ち退きをさせられ、復興は遅れています。浅野燃糸の新工場は双葉町経済復興の拠点となるとともに、破壊されたコミュニティ回復のための憩いの場ともなることが期待されています。



浅野燃糸双葉事業所上空から

双葉町フェースブック [<つなげよう つながろう ふたばのわ>](#) 2/27

2 月 25 日、中野地区復興産業拠点に建設された浅野燃糸双葉町事業所の内覧会が行われ、オープン前には行列ができるほどたくさんの方の来場者で賑わいました□

浅野燃糸は、特許を取得している魔法の糸「スーパーZERO」を生産する企業で、この糸で作られたタオル「エアーかおる」は、吸水性、速乾性、肌触り等が抜群に良いことから「魔法のタオル」として人気です◎

双葉事業所は、燃糸工場「フタバスーパーゼロミル」とタオル「ダキシメテフタバ」や「エアーかおる」の販売直営店「エアーかおる双葉丸」が併設されています。来所した方が利用できるカフェ「キーズカフェ」も併設されており、内覧会当日は出口でコーヒーが無料で配られました□♡

////////////////////////////////////  
**【行動隊 4 月-5 月スケジュール】**

●院内集会

5 月 17 水曜日

●SVCF 通信発行

4 月号 25 火曜日

5 月号 24 水曜日

●連絡会議

以下の各金曜日 10:30-

4 月 28

5 月 5、12、19、26

